

(雑型) 博士学位論文内容の要旨

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 堂園 俊彦 |
| 学位の種類 | 博士 (文学) |
| 学位記番号 | 人博 第102号 |
| 学位授与の日付 | 平成29年3月21日 |
| 課程・論文の別 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 学位論文題名 | 「人間の尊厳」と生命倫理 |
| 論文審査委員 | 主査 教授 石川 求 委員 准教授 木田 直人 委員 特任教授 松田 純 (静岡大学) |

【論文の内容の要旨】

「人間の尊厳」と生命倫理

堂園俊彦

今日、生命をめぐる国内外のルール作りにおいて、「人間の尊厳」は重要な役割を果たしている。わが国においては、2001年6月に施行された「ヒトに関するクローン技術等の規制に関する法律」において、「人の尊厳の保持、人の生命及び身体の安全の確保並びに社会秩序の維持…に重大な影響を与える可能性がある」（第一条）ゆえに、クローン個体（クローン人間）を生み出すことが禁止された。また、2014年に制定された「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」は、「人間の尊厳及び人権が守られ、研究の適正な推進が図られるようにすること」を目的としている。さらに「社会福祉士及び介護福祉士法」では、2007年の改正に伴い、「個人の尊厳を保持する」ことが社会福祉士及び介護福祉士の義務とされ、新カリキュラムでは「人間の尊厳と自立」という大項目が立てられているのである。先端医学研究から医療・介護の領域まで、今日、人の生命が関わるところ、人間の尊厳が語られると言っても過言ではない。しかし、こうした社会的な広がりに対する批判も存在する。人間の尊厳は、曖昧であり、論争を解決する上でまったく役に立たないだけでなく、自分の立場を相手に認めさせる都合のよい道具として使われているというものである。以上のような状況を踏まえ、本研究は、以下の二点を目的とした。すなわち、第一に、人間の尊厳を、曖昧さを否定的に捉えない枠組みにおいて理解すること、第二に、人間の尊厳の恣意的な使用を避ける手段を提示することである。

第一の課題に対して本研究は、人間の尊厳を、事実的要素と評価的要素とが絡み合った「厚い概念」として捉えることで答えようとした。現代において、事実と価値を区分することは一つの常識に属する。しかし少なくとも人間の尊厳に関して、両者を区分することは容易ではない。これまで、「人格とは何か」「どのような存在に人間の尊厳が備わるのか」という問いに対して、さまざまな記述的性質が基準として提示されてきた。しかし、人間の尊厳の適用基準を、「記述的性質A、B、Cをもつ存在は尊厳をもつ」といった形で取り出すことができるという想定自体が、誤りなのである。もちろん、明確な適用基準をもたないということは、尊厳に関して判断できないということではない。大切なのは、規則とは別の仕方でも、尊厳が侵害されている事態を個別的に捉える評価的視点をもつことなのである。

第二の課題を検討する中で本研究が着目したのは、「討議」である。人間の尊厳は、単に「捉えられる」ものではない。パトナムの「存在の多元性」という議論を通じて示されたのは、人間の尊厳が、われわれが何を為すべきかを判断する上でも重要な意味をもつということであった。しかしここには、確かに恣意的な使用を許す余地があった。なぜなら尊厳を守る上で遵守すべきと

されてきた目的自体の定式は、それ自体空虚だからである。範型論的な公序良俗論が示していたのは、目的自体の定式に実質を与える良俗が、ときとして個人を抑圧する可能性であった。そこで本研究では、良俗とされているものを鵜呑みにせず、基本権の観点からスクリーニングにかかる討議プロセスを経ること、しかも、法やガイドラインといったレベルだけではなく、個別的な場面において討議を積み重ねることの重要性を指摘した。ちなみに、個別的な話し合いは、人間の尊厳を守るために、何を為してはいけなさを判断する場合だけではなく、何を為さなければならないかを判断する上でも、重要な意味をもつ。子どもの福祉をめぐる議論が示していたのは、このことであった。

人間の尊厳はそもそも曖昧な概念であり、この概念を適切に用いるには、適切な評価的視点を獲得しなければならない。その意味でこの概念には恣意的な使用のリスクがつきものなのである。このリスクを避けるには、何を為すべきではないのか、何を為すべきなのかを、事例ごとに、討議を通じて、問い直す必要がある——本研究の目的に対する答えは、このようにまとめられる。もちろん本研究には、積み残された多くの課題がある。例えば、個別的な判断を重要視する枠組みにおいて、法などの一般的な規範はどのような役割を演じるのか、権利と尊厳との関係はどのようなものなのか、さらには、キケロー以来の尊厳をめぐる膨大な議論の中で、本研究はどのような位置を占めるのかなどは、そうした課題である。本研究で示された立場を土台として、今後、これらの課題に取り組む予定である。